

日本新聞製作技術懇話会  
広報委員会編集

編集人 辻 裕史  
東京都千代田区内幸町  
日本プレスセンタービル  
8階 (〒100-0011)  
電話 (03) 3503-3829  
FAX (03) 3503-3828  
<http://www.conpt.jp>

# CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER  
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.35 No.5  
2011.9.1  
(通巻 209号)

日本新聞製作技術懇話会  
会報 (隔月刊)  
(禁転載)



## 目次

震災半年、備えと課題を考える	河北新報社 印刷局長	白鳥 正	3
	システム局長	草刈 順	3
新局長に就任して	沖縄タイムス社 システム局長	禰覇 洋一	5
	河北新報社 印刷局長	白鳥 正	6
	熊本日日新聞社 印刷局長	河島 健一	7
	信濃毎日新聞社 印刷局長兼長野製作センター長	木内洋太郎	8
	中日新聞北陸本社 技術局長	三盃賢一郎	9
	報知新聞東京本社 制作局長	荻原 博文	10
	読売新聞東京本社 取締役制作局長、システム担当	早川 正	11
楽事万歳	佐賀新聞社 編制局印刷部部长	古賀 徳康	12
	ニッカ(株) オフセット印刷機器本部部长	角川 武	13
会員社レポート	パナソニック SS インフラシステム(株)、(株)東京機械製作所		14
	(株)イリス、岡本化学工業(株)		15
第108回技術懇談会記			16
CONPT日誌他			16

●表紙写真提供：CONPT TOUR2010 入選作より

第一工業 平賀 康正氏「ハンブルク市庁舎」

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター



の情報もなく孤立状態だった読者から「朝、新聞が届いて感激した」「新聞で初めて状況が分かった」と感謝の声が多数寄せられた。

**【復旧へ】** 本社の復電は翌12日午後3時、印刷センターは4時半。ネット回線はOCNが11日午後9時、IIJは12日午前6時に復旧。センターに紙面データを送る回線は12日朝にNTTが通信不可、予備の東北インテリジェント通信(昨年8月導入)に切り替わった。

印刷センターの自家発電(タンク3万1950ℓ)は定期訓練で重油を消費、当時は残2万4320ℓ。号外・朝刊作業など約26時間で1万4600ℓを使い、12日の朝刊作業で底をつく状態だった。13、14日に特注した重油が酒田と新潟から届いたが、タンクを満杯にできたのは2週間後。水は発生直後に受水槽30ℓを手動で満杯にした後に断水。3日はしのげる計算だったが、13日から給水車で補給し17日に通水。湿し水よりも一般飲用、空調コンプレッサーで大量に使うことが判明、蛇口制限、空調加湿停止などの措置を取った。用紙の在庫は5～6日分。取引先の4工場全てが被災し先が不透明だったが、他工場への手配と日本製紙岩沼工場の在庫で何とかしのげた。

紙面の自社制作は翌12日夕刊モノクロ4段(通常カラー8段)でスタート。13日(日曜)は夕刊と同様扱いの4段号外を発行。夕刊4段建ては31日まで続き、4月1日から6段に。朝刊は13日付が12段(カラー7段)の1版制。通常2版制で28段前後だが、用紙不足問題もあって震災関連に絞った紙面とした。朝刊の基本建ては3月25日付から16段、4月1日付から20段、5月13日付から22～24段。6月からは24段体制が定着、ほぼ通常体制に戻りつつある。

**【備えと課題】** 通信関係などソフト面で、二重三重のバックアップの必要性を痛感した。想定外の弱点は、インターネット接続回線のダウン。共同通信の社内ネットが使えな

かったら、支援協定で作ってもらった貴重な紙面を取り込めなかった。共同は専用回線がソフトバンク回線に切り替わり、記事・写真の受信も支障なく、東京本社のサーバー経由でネットも使用可能だった。また河北と中日、新潟などの友好7社回線が健在で自社記事・写真を新潟側に送信できたのも大きい。加えて顔の見える連携・協力の大切さを感じた。新潟日報とは1カ月前の紙面交換テストを通じ面建てや体裁、作業手順を確認していたからこそ混乱なく運用できたのだと思う。

ハード対策も重要だ。本社8階は初動900ガルでもフリーアクセス(高さ50段)が外れない耐震補強工事済みだった。床下にアンカー固定したラック収容型サーバー(素材管理、出力系、メディア系など)はほとんど被害がなく、自社原稿の受信、出稿は通常通りできた。ハード面で最大の威力を発揮したのは、免震構造だ。宮城県内の印刷工場で当日稼働したのは河北新報だけ。東北全県が停電し輪転機が無事でも印刷できなかった社もある。宮城県沖地震に備え、自家発電と免震構造という万全の体制を敷いたことが奏功した。その構造は、揺れを吸収する積層ゴムアイソレーター74基と滑り支承46基の計120基の円柱(直径50～90段)で建屋全体を支える仕組み。ゴムと鋼板を重ね合わせた円柱が変形したり、ステンレス板上を滑ることで地震の力を弱める。震災後、センターに視察が相次いだ。

今回、新聞は発行できたが、紙幅やカラー面を制限せざるを得なかった。その後のガソリン不足への対応を含め、電気、水、通信などのインフラが長期間使用不能という想定についての対策はまだ不十分である。震災後、本社ではマシールームの耐震補強を実施したほか、電話、モバイル、インターネットの不通に備え、通信キャリアや無線設備会社から様々な提案を受けている。今回の対応を検証し、ハード、ソフト両面から地震対策の見直しを急ぐ必要がある。

# 新局長に就任して

## 多メディア展開が課題

沖縄タイムス社 システム局長

禰覇 洋一

1972年工務局植字課に入社。72年は沖縄が5月15日に本土復帰した年で通貨もドルから円になり世替わりの年でした。当時は勿論1ページ15段15文字詰めで鉛の時代です。その後、職場もCTSになり制作局制作第2部、制作局制作部、編集局編制本部制作部と職場の名称は何回か変わりましたが、仕事は新聞の組版作業畑一筋で夜勤の多い職場でした。1カ月の勤務体系は月の半分が夜勤で、夜勤の日は午前2時ごろ帰宅し、朝刊作業の興奮した神経を鎮めるため「夏はビール」「冬は泡盛」で一日の疲れを癒して、3時ごろ就寝。7時ごろには子供たちが学校に行く仕度をする声で目が覚め、送り出してからまた一眠りする毎日でした。従ってなかなか熟睡できず体内時計も狂いっぱなしでした。



2008年の次長就任で夜勤よりも昼勤の日が多くなり、自然と早寝早起きが習慣になったことで、いつの間にか体内時計も正常に働くようになった。また、寝酒なしでも眠れるようになり、23時就寝、5時半起床と健康的な毎日を送れるようになったのもこのころからでした。早寝早起きをして毎日朝日を浴びる。休みの日は1時間のウォーキングとストレッチ。決まった時間の食事など、睡眠、運動、食事と規則正しい生活習慣が如何に大切か実感している毎日です。

さて、弊社は今年7月にメディアシステム本部のシステム部と編集局編制本部制作画像

部を統合しシステム局が誕生しました。初代システム局長に就任して1カ月半が過ぎましたが、新聞製作システムの変更、全社システムの一元化と保守管理、多メディア展開への対応、琉球新報社との災害協定推進など、システム局に課せられたテーマは非常に重要で身の引き締まる思いです。

\* \*

システム局統合の前段として今年3月には編集局編制本部の制作部と画像部を統合し制作画像部にしました。両部を統合することにより、相互研修で部員のスキルアップを図りながら新システム移行時の作業を少しでもスムーズに進めることが出来ると考えたのですが、日常の作業に追われ、なかなか思った通りの研修ができないまま7月のシステム局誕生となってしまいました。

来年末の新社屋移転に合わせ1998年から親しんできた現在のオーシャンシステム(キャノン)から次期新聞製作システムをNECにすることを7月末に決定したばかりですが、新システムではワンマン組版の実現と画像最適化導入などで省人化を実現したい。

これまでのメディアシステム本部では3人の部員で全社のシステムを担当していたため、多メディア展開に向けた研究・開発まで手が回らなかった。しかし、新システムへの移行で業務の効率化、省力化、迅速化、自動化などが見込めるため。そのメリットを先取りしシステム局を誕生させた。制作画像部のシステム担当もシステム部に統合し11人に増やすことが出来た事は今後大きな力になると確信している。

当面は、新システム移行や社屋移転に全力を傾注せざるを得ないが、新システムが安定稼働し軌道に乗った段階で、システム局に統合したスケールメリットを最大限に発揮し、地方紙としての多メディア展開の可能性を模索していきたい。

## 新局長に就任して

### 支えられて生きる

河北新報社 印刷局長

白鳥 正



それまで部下任せにしていたツケが回ってきたに違いない。東日本大震災の当日、免震構造のおかげで被害ゼロだった印刷センターにいながら、一人混乱していた。

「3.11」は入社以来の編集職場を離れ、未経験の印刷勤務となって1年が過ぎようという時である。日々の業務は何とか把握していたつもりだが、非常時の対応には無防備だった。大きな声では言えないが、センター内に災害対応マニュアル「総合防災対策要綱」があることさえ知らなかった。

免震構造とはいえ、揺れは大きく長い。ローリングする大型船内のような感覚だった。停電、自家発電下ですぐに輪転機はじめ生産設備の点検に入ったが、実はこの時点ではまだ大地震の認識は乏しかった。編集局から「大丈夫か！印刷できるか？」「本社は建物から避難命令が出た！」という連絡で、「これは尋常ではない」と初めて自覚した。現にわが机からは物一つ落ちていないのだから。

\* \*

問題はそれから。ふだん頼りにしている印刷総務が不在。どこをどう点検すればいいのか分らず、部員に「大丈夫か？回せるか？」と聞くばかり。幸いみんな冷静で、粛々とチェック作業をこなし、間もなく「問題なし。OKです」と頼もしい返事が返ってきた。本社の組版サーバーが倒れ、センターにはシステム部員や整理部員が続々と詰めかけてきたが、インターネット回線がダウンし、新潟日報で

制作してもらった紙面が取り込めない。無傷の輪転機が回せないのか。イライラが募る中、システム部員らの奮闘で紙面データを何とか取り込む。後は大丈夫。号外と8分に減った朝刊は問題なく刷り終えることができた。

実は、翌日からが大変だった。夕刊は無事に刷り上がったものの、自家発電用の重油が底を尽きかけていた。水も足りない。紙の見通しが見つからない。さて、どうする？「あすの朝刊作業で、燃料切れ。輪転機は回せない」。覚悟を決めた。「やれるところまでやろう」

捨てる神あれば、救う神あり。12日夕、電気が通った。給水車の手配も付きそう。重油が入るとの連絡もあった。そして13日午後、福の神がまとめてやってきた。2トンのバケツリレーを覚悟しながら給水車の受け入れ準備をしていた時、なんと、巻き取り輸送のトラックが入ってくるではないか。予想外の吉事！電話が繋がらない中、工場の判断で車を出したという。「在庫品が使い、毎日2台で運びます」というありがたい言葉。さらにタンクローリーが酒田市から到着、前後して給水車もやってきた。涙が出そうになった。

\* \*

周りに支えられて生きている。人も組織も。その後、新聞各社から支援物資が続々と届いた。印刷センターも数台のトラックの受け渡しを担当した。ガソリン確保、食料調達…。非常時、本来業務よりも連絡調整が主になった。うまくいくかどうかは、いかに相手の立場を理解するか、状況を想像できるかだろう。

地震発生から2週間、ほとんどセンターに泊まり込んだ。この1年、なかなかしっくりこなかった職場がようやく体になじんだ気がした。混乱の中での人事発令。震災後も対応に追われ、「局長」を意識しはじめたのは最近のこと。本稿執筆からと言ってもいい。立場は変われど、周囲に助けられていることだけは間違いなし。相手のことを考え、思いを巡らす。非常時に限らず、励行したい。

## 新局長に就任して

### 発想の転換は必需品

熊本日日新聞社  
印刷局長

河島 健一

サッカー女子ワールドカップ決勝。きょうのゴールキーパー海堀は好調だ。PK戦の一発目を足で止め、相手の動きが見えている。もしかして…。「優勝」の二文字が頭をかすめた。対戦相手の米国には未だ勝ったことはなかった。この日のなでしこジャパンは最高の点の入れ方をした。リズムは日本にあった。熊谷のPKがゴールへ、我が家では興奮が最高潮となった。二女が女子サッカーのチャレンジリーグに所属しており、なでしこ優勝はことさら感無量である。興奮も覚めやらずに会社に出勤した。6月に印刷局長を拝命し初めての輪転号外の印刷であり、一生の思い出となった。



総合メディア局からの異動で印刷局に。メディア感覚ならば「優勝のメール速報は出すべきか」、しかし「早朝で迷惑メールにならないか」と論議したに違いない。もちろん速報すべきとの結論になる。デジタル情報は速報と蓄積することで価値が生まれる。メディアサービスもコストをかけずに、今までにないサービスを提供するのがポイントである。そのため、システムも自ら構築するのではなく、ハードウェアも購入しないし、アプリケーションソフトも開発しない。今風にいえばクラウドサービスを使うことを前提に考える。システムのライフサイクルも3年から5年程度か。

「フリーミアム」的発想で利益を出す仕組み作りが問題である。フリーミアムとはフリー（無料）とプレミアムの造語。無料にするのは広告主、情報提供者、それとも利用者。プレミアムを与えるのは広告主、情報提供者、利用者の中で誰にするのか。こんな発想で情報サービスを考える必要がある。デジタルメディアや情報サービスの最先端の動きにアンテナを立て、目先を追いかけ売り上げを追及すると同時に遠くを見据え戦略を練る。こんな要素を考えながらシステムを構築し、システム運用を行い、様々なリスクをヘッジしてきた。

\* \*

一方、印刷の眼で輪転機や発送機器を考えると、「軽薄短小」から「重厚長大」の世界に突入する。輪転機は1セットで約400トン。サテライト圧胴は直径約70センチメートル。全長は約20メートル、高さは約14メートルと重くて大きい。メディアの考え方が体に沁み込んでいるだけに、発想の転換が必需品となっている。特に輪転機のライフサイクルがメディアシステムと違っている。輪転機のライフサイクルは15年と考えられていたものが、20年いや25年にもなりそうな気配だ。確かに機械的には頑丈にできている。しかし、制御部の電装品関係は生産中止の話をよく耳にする。保守の考え方とライフサイクルがミスマッチの状態だ。高価な設備であり、太く長く使いたい。輪転機のバックアップも、メディアシステムのようにそう簡単に設備投資する事もできない。

\* \*

サッカー女子ワールドカップ優勝はこれまでの試合経験と、自分ではできると信じて練習する技術の向上心がもたらしたものだろう。これからの印刷のあり方は、これだけでは務まりそうもない。輪転機延命策の『必殺技』はないものだろうか。

## 新局長に就任して

### 安定稼働へ局一丸

信濃毎日新聞社

印刷局長兼長野製作センター長

木内 洋太郎

7月15日印刷局長に就任、この原稿執筆時点で3週間経った。緊張が続くせい、時の経つのが遅い。初の生え抜き局長ということで、色々言われることも面映ゆい。1978年の入社以来33年間、工務局から印刷局と名は変わったが、工務印刷畑一筋でやってきた。



今ごろになって思い出されるのが入社試験での面接。当時の工務局長から「これからの新聞印刷の方式はどうなる」と質問された。大学では印刷工学を専攻していたが、生半可な知識で「オフセットは時期尚早。まだ凸版の時代が続くと思います」と明快に答えた。入社して驚いた。なんと面接時点で松本工場では凸からオフへの改造が始まっていたのだ。79年には全機改造完了、その翌年には「レターオフの改良と実用化」で新聞協会賞を受賞した。全くもって汗顔の至りである。

\* \*

80年には長野工場が一新。オフ輪を導入しカラー印刷が始まる。まだ24ページ4個面カラーだったが、その後怒涛のごとく多ページ・モアカラーへの道を突き進んだ。

90年代になると、松本工場の老朽化が深刻になり輪転機トラブルによる刷了の遅れが頻発した。このため94年には隣の塩尻市に新工場を建設。カラーは当初、サテライト機2台の設計だったが、静岡新聞社で開発中のタワー（4Hi）機を見せてもらい、その完成度の高

さを確信、タワー・サテ各1台の構成とした。これがタワー時代の幕開けだった。

信毎は現在、長野と塩尻に印刷工場を構えている。その長野では01年に新工場建設に携わった。40ページオールカラーとCTPが目玉だった。一方の塩尻は二度のお勤め。今回の異動までの約9年は塩尻で過ごした。久々の長野センターは顔と名前が一致しない人も多くなり、さりげなく作業着のネームを凝視しインプットしている。

\* \*

さて、今、印刷局に最も求められていることは、高品質・低コストの紙面を安定的に生産することだろう。品質の面では、CTP化、新AMスクリーン、GCRの実用化とかなりの水準まで達していると思う。ここ数年、損紙削減にも力を入れ、結果を出してきた。そして今、最重要命題は安定稼働だと思っている。たった一度の遅れでそれまで積み上げてきた信頼・信用を失ってしまう。取り戻すことは容易ではない。

塩尻の2セットは3年前に新設したが、1セットは開業時からのもので18年目だ。長野ももうすぐ10年、安定稼働のためには老朽化対応が急務だ。また、2工場あれば両方倒れることはないだろうと高を括っていたが、今回の震災で「電気」を断たればどうにもならないことを思い知らされた。長野センターへの発電機導入を進めているが、建屋・生産設備の耐震をどうするか、悩ましい課題だ。

機械設備は年を経るとともに心配度が増していくばかり。一方、うれしいのは若い人たちが、経験を重ね着実に成長していくことだ。ぎこちない動きだった新人が、機敏な動作に変身していく姿が頼もしい。

新聞社の経営環境が厳しくなるなか、限られた予算をどこにどう使うか、限られた人員でいかに効率的で実のある保守・整備をしていけるか、印刷局一丸となって知恵を絞り、汗を流していく決意です。

## 新局長に就任して

### 忙しいけど楽しいぜ

中日新聞北陸本社 技術局長

三益 賢一郎

6月24日付で北陸本社に赴任しました。「だいたいのは片付いているから、やることは無いよ」とは周囲の声。というのも、それまでに北陸本社では二つの大きなイベントをこなしていたからです。一つは昨秋の新社屋移転、もう一つは今年4月から始まった朝日新聞、日本農業新聞の受託印刷です。



先人の敷いたレールをひた走れば良い環境にあるのですが、いまだに戸惑いながら毎日を送っているというのがこれまでの状況です。

\* \*

旧社屋は、前田利家を祭った尾山神社の向かい、繁華街の一角にありました。新社屋はそこから直線距離で2.5<sup>km</sup>、金沢駅を挟んで西側にあります。駅から石川県庁、金沢港に延びる大通りに面しています。

引越しは、実質、昨年10月の休刊日一日で行われました。当時私は名古屋本社で後方支援していた立場ですが、北陸本社に来て思うことは図面や計画表では分からなかった苦勞がいっぱいあったということです。私ならもうこれだけで手一杯になっていたかも知れません。

受託印刷に関してはもっと大変。膨大な量の資料がそれを示しています。ダイヤ、輸送、紙面受信、支度情報、バックアップ…どれも多くの案を検討してたどり着いた結論であることがよく分かります。

印刷開始以降は大きなトラブルもなく、順調に稼働しています。限られた時間でよく達

成出来たなあ〜と私は感心するばかりです。

大きな作業を短期間でやり遂げた局員の能力をどう生かすか、私に託された課題です。赴任早々局員に、働きがいのある職場にしようと呼びかけました。「忙しいけど楽しいぜ」という職場、私の理想です。

\* \*

北陸中日新聞独自の紙面に「popress (ポップレス)」があります。「20代記者がつくるページ」と銘打ち、取材記者も整理記者も若手だけでつくっています。編集局長と話していたら、その話題になりました。名古屋本社に行くと、若い記者から北陸本社への異動希望を聞くというのです。若手が意欲を持って好きなことができる本社で仕事がしたいと。

技術局もそうしたい。思いっきり仕事ができそうだから金沢の技術局に行きたい—そういう志願者が集まる局にしたいと願うのです。

能登で生まれ育った私にとって40年ぶりの石川県になります。入社以来、半分を技術職場、半分を整理部で過ごしました。北陸本社でも編集局の方が顔見知りが多いのですが、それより技術局員の「人となり」を覚えなければと思っています。

印刷部の会合で「編集出身の新局長」という紹介をされました。前任の名古屋本社では技術局でも上流システムの職場を担当していたため、印刷に関する知識や人脈は極めて貧弱です。そう言われるのも無理ないことです。しばらくは印刷工場へ通って輪転機を眺めていようと思っています。

\* \*

金沢では単身赴任。還暦まであと1年での独り暮らしですから、身体に気をつけようと思いはじめました。名古屋時代の「ガンガンバリバリ」を知る人は、そういう考え方をする私に一番驚くかも知れません。局員と一緒に「忙しいけど楽しい職場」をつくるには、忙しさに負けない体力が必要ですから。

## 新局長に就任して

### やっぱり、新聞っていいな

報知新聞東京本社  
制作局長

荻原 博文



6月7日に報知新聞(東京)の制作局長を拝命しました。まだ数カ月のキャリアです。私事になりますが、やけに忙しく、常に勉強し続ける日々です。

それでも、日常のもろもろは、すぐに消え去って行き、残るのは常に、あの3月11日のことです。被災地の皆さんから言えば、笑われるようなことですが、あの日の恐怖は東京にいても大変なものでした。すぐ頭に浮かんだのは、家族の安否でした。さらに続く、原発の恐怖。幼い子のいる親類は本当に心配していました。

仕事の上でも、あの日の新聞工程は各社、必死のものだったと思います。わが社でも、大幅な繰上げは当然として、紙が足りない、都内の道が帰宅難民の渦で発送車両が動けないなど予想もしない事態に見舞われました。読売グループの仙台工場は、あの日以来、1度も動くことなく、事実上の停止です。従業員の皆様は、さぞ無念であろうと思います。

震災直後の現地からの報道も胸を痛めるものばかりでした。母をなくした少女、孫をなくした老婦人。紙面に載った写真を見るのが辛くなるほどでした。

\* \*

3月11日は金曜でした。実は私は、その前の日曜日3月6日に鎌倉にいました。仏様を見るのが学生時代からの趣味で、その日も久しぶりに大仏様を拝みに行きました。

大仏殿の近くで、2人乗りの人力車に出会いました。一人は70歳くらいの老婦人、もう1人は10歳くらいの女の子。たぶん、お祖母さんと孫なのでしょう。女の子は人力車に乗るのが始めてなのでしょう。本当にうれしそうな笑顔でお祖母さんに話しかけていました。大震災の後、そのことが思い浮かびました。一方で、幸せがあります。一方で、孫に死に別れた老婦人がいます。

この震災で新聞の役割が改めて分かったような気がします。リアルタイム性ではTVやネット動画にかなわないことは事実です。でも、人がどう悲しみ、人がそこからどう立ち直っていくか、それは新聞でしか描けないのだと思います。制作局がそれにどう係わっていくのか。記者・写真パソコンから、組版、輪転、発送までをスピード化し、読者に最新のニュースを伝える。それが基本だろうと思います。

\* \*

でも今回の震災ではもう一つの要素が出てきました。『読者に安定して新聞を提供する』。災害時ならより以上にそれが必要なでしょう。そのためには全国の新聞が、今までどおり競争は続けつつ、協力を深めることです。わが社もこの間、印刷、発送業務は大きく乱れました。普段はあまりお付き合いのない社にも、多大な協力を頂き感激したほどでした。新潟日報社殿を含め、東北地方の各社の災害協定が稼動したのは意義深いことです。

システム、印刷、発送の各社協力体制を強化し、読者が災害時でも安定して読むことが出来、力付けられる紙面体制を作っていければと考えます。

鎌倉の大仏様は阿弥陀如来です。長寿を全うし、西方極楽浄土の阿弥陀様に会えれば幸いです。でもそれは稀のようです。読者のために、あがいて、より良い紙面を作って行きたい、と考えているところです。

## 新局長に就任して

### 「談論風発」の全員野球

読売新聞東京本社  
取締役制作局長・システム担当

早川 正

3.11東日本大震災では海峡を隔てた北海道も大きく揺れた。13歳の時に経験した新潟地震の体感に似た、長く気味の悪い揺れ。「これはすごいことになる」と思ったが、予感をはるかに上回る惨状に茫然自失の状態が続いている。被災地の人々の身を真に思いやる想像力がすべての日本人、わけてもメディアに問われていると思う。



読売新聞は東日本19工場のうち六つが震災で一時ダウンし、東北の旗艦・仙台工場が深手を負った。被災を免れた北海道支社のトップとして人員や物資の後方支援にあたってきたが、まさか3か月後に、今度は生産復興の指揮を執ることになろうとは。これまでも、地方部長で新潟・中越地震、編集局次長で同・中越沖地震と地震には縁があった。何かの巡りあわせというほかない。

制作局勤務は今回が2度目になる。といっても前は18年前に、わずか1年3か月ただけだが、人生の「原風景」ともいえる鮮烈な印象をここで受けた。新聞社は広く様々な職種があり、その連携ではじめて新聞ができ、読者のもとに届く。編集しか知らない者がただ頭で理解するのではなく、五感でこれを体験できたことがとても貴重だった。

当時はまだ「工務局」の名残をとどめ、技術系は技術、システムの2部のみで、数百人の部隊を抱える印刷、発送部が一大勢力だった。

現在では両部門とも子会社、委託方式に変わり、局本体の構成も技術職が大多数を占めるなど様変わりした。だが、内局、外局の違いはあれ、一体になって新聞という言論商品を作っているのだという気概は健在と感じた。こうしたモラルや、部門間の垣根の低さはよそに誇れる文化だと自負している。

\* \*

就任にあたり三つのことを訴えた。第一にどこよりも強い新聞社になろう。ポイントは「商品力」と「販売力」と「技術力」。制作局は技術力だけでなく、編集局と並ぶ商品力の担い手であることを自覚し、活字、見出しや広告、カラーまで完璧にこなす。どんな条件下であれ販売店、読者に届けるのも「商品力」。この2点に徹底してこだわる。

第二に本業の技術力で「ナンバーワン」をめざす。支社長として業務全般を見てきた側からすると、重厚長大なわりに稼働率の良くない装備、労働集約型の構造にメスを入れる余地はまだある。技術者全員が生産性の向上に知恵をしまし、日常の仕事でまず一歩、階段を上がる「改善」目標を立て、実践する。上意下達の富士山型ではなく談論風発の八ヶ岳スタイルでいこう。

三つ目に、企画立案にあたっては「最小の投資で最大の効果」をめざす。言うは易く行うは難しの典型。取引先とは緊張感のある連携を。徹底吟味、セカンドオピニオンの活用に努め、脇を締める。

「ど」の付く素人が偉そうなことを言ってしまったと後悔しているが、この間、仕事を共にして、彼らを改めて好きになった。思慮深く、堂々と物を言い、責任感も強い。何より仕事に対し高をくくらず謙虚であるところに好感が持てる。「紙」媒体を大黒柱にしながらデジタル媒体への対応も抜かりなく。業界を取り巻く環境は厳しいが、力を合わせ、「疾風に勁草を知る」と言われるような存在になりたいと思う。

# 樂事万歳

## くじ引きで広がった見識

佐賀新聞社 編制局印刷部部長

古賀 徳康

人生最大のうねりの始まりは2006年春、運命のくじ引きが実行された日。その年、長男が中学に入学したのだが、地区ごとの持ち回りでPTA役員を選出があり、すったもんだの揚げ句見事と言うか悲しくも引き当ててしまったのです。教育に関しては入学式や卒業式ぐらいしか行った事が無く、ほとんど妻に任せっきりで学校の事なんてチンプンカンプン。そんな状況にも関わらず最初の役員会議での事、自分の思いとは裏腹に佐賀新聞社の看板はとても大きく、その肩書に集まった保護者の視線がキラキラと期待の眼差しが注がれているのを感じました。最初の年は副会長の役職でしたが引き受けたからには手を抜く事が嫌いな性質。きちんとやらねばと言う思いから、夜勤明けや仕事前、時には休みの日も関係なく35年ぶりに母校通いの生活が始まりました。前向きに考えれば奇しくも教育行政の一端を内部から観察できるチャンスに恵まれた訳です。

\* \*

学校と言えば勉学の次に非行・虐め問題がクローズアップされている時代。ご多分に漏れずちょっとした問題があり良からぬ噂が市外まで飛び交っていました。校長と会長の機転により保護者を招集しようとなったのですが、ただ呼びかけたのでは最近の保護者はなかなか集まってくれません。そこで一計を案じ(私が仲介した訳ではないが)知名度の高いわが社のT論説委員長の講演を依頼。予想以上の大盛況で内容も考えさせる事が多く、

興奮も冷めやらぬうちに本題の対応と説明を済ませ大事に至らずに済んだのでした。

危機管理と言えば携帯電話とメールも大きな問題でした。一部の生徒の間でメールに嵌まり睡眠不足になったり、有料サイトに接続して数十万の請求がきたりで深刻な状況も報告されていました。学校では不必要と言って簡単に禁止できる問題でもなく、ならば危険の周知徹底とマナー教育を徹底しようと言う対応でした。一方では保護者の管理責任が占める割合も大きいとしてPTAを通じて訴えていました。そう言う流れが全国各地で沸き起こり、マスコミも大々的に報道するようになって通信会社がセキュリティーと承認強化に本腰を入れ始めた年ではなかったかと記憶しています。小さな問題のうちに気付き、いち早く対策を打ち立てていた教頭の行動力には感心させられたものでした。

\* \*

成り行き上、翌年は会長になった訳ですが、何と言っても一番緊張したのは卒業式。ぶっつけ本番の一発勝負で失敗は許されない神聖な空間。厳粛な空気の中で深呼吸し壇上に上がる数歩を踏みしめて国旗に一礼。振り返れば400名近くを見渡す壮観さに一瞬で覚悟が出来ました。祝辞を自分で考え何度も車の中で声を出して練習した努力が実り、無事に大役を果たせた事に満足感で一杯でした。その夜、校長に頼み込んで教職員の慰労会に参加させてもらいました。子供が入学し紆余曲折を経て卒業までに大きく成長する時の思い出やエピソードに、先生達の涙ぐむ姿や熱い情熱を感じ取った一夜でもありました。卒業式で一区切りできる先生がこの日ほど羨ましいと思った事は無いほど感動の一日でした。

考えてみればこんな経験は誰にでも出来る事ではなく貴重な体験をさせてもらったと感謝しています。そんな思い出と共に学校には「感動・感謝」の標語が掲げてあった事を今も心に刻み、心豊かに過ごせたらと思っています。

# 楽事万歳

## 心と体の健康について

ニッカ(株) オフセット印刷機器本部部長

角川 武

楽事万歳の場をお借りして、健康の話題を申し上げるのは、甚だ僭越ではありますがお許し願います。

私のスポーツクラブ歴も四半世紀となります。10年ほど前の私は兎に角走る事に夢中でした。冬場にはクラブ仲間と月に1回は市民マラソン大会にエントリーし、月間走行距離も150kmを越え、我ながら良くやっていたと思います。当時の夢、ホノルルマラソンは目の前にある手の届く夢でした。市民ランナーの第1関門であるサブフォーもクリアし、自分でも健康には自信を持っていました。ストレスの解消を目的に走り始めた事もあり、ある意味体の健康と心の健康も一挙両得で得られる最良の状態だったのかもしれませんが。また、走る事は私に色々な楽しみを与えてくれました。高橋尚子さんのシドニーオリンピック金メダルもある大会当日で、趣味を同じくする仲間とラジオの中継に夢中になったのも良い思い出です。

\* \*

そのような至福の時もある日を境に終わりを告げます。その日は台風の直撃を受け高速道路が通行止めとなり、車で移動していた私が目的地に到着したのは真夜中でした。その途中の車の中でラジオから流れたのが9.11テロのニュースでした。ホテルでも真つ暗な部屋の中で、音声を消したWTCビルの映像から目を逸らす事が出来ませんでした。私の人生の転換点となった出来事の開始日が9.11と重なる事により、一生忘れられない記憶となっております。

そして数ヵ月後には失意のどん底をさ迷う事となります。心の挫折から体を動かす事さ

え出来なくなり、更に数ヵ月後には体が悲鳴を上げ大きな病に陥ります。人間の体とは不思議なもので、心と体が密接に関係していると改めて感じさせられました。健康な体も意外と簡単に壊れる事実も学びました。以降の10年間は心に負担をかけないように心がけて参りましたが、残念ながら体を動かす事は出来なくなってしまいました。いつかはと見え、スポーツクラブは退会せずに継続しています。取り敢えず今は通う事が最優先、通っていればいずれ体を動かせるだろうと開き直っていますが、ここ数年はお風呂だけの付き合いが続いております。この10年間は私に15kg程のお肉と100mも走れない体をプレゼントしてくれました。

\* \*

私の出身地でもある東北地方を襲った未曾有の大災害。この東日本大震災を契機に世の中が大きく変わりました。そして私の回りでも、仙台に住む従兄弟が亡くなりました。しかも震災から数ヵ月後の事です。直接の被害は無いと聞き安心していた矢先の出来事でした。心筋梗塞で家族にも気付かれずに亡くなりました。

後日分かった事ですが、震災の影響で会社の移転が決定し、秋には解雇される事が決まっていたようです。家族を抱え彼がどれ程の不安に駆られていたのか、その不安がどれ程体を蝕んでいたのか、10年前に経験して運良く生還した自分はなぜ気付いてやれなかったのか、考える事が多くどうしようもない気持ちになります。ただ、震災を契機に、今生きている者として精一杯この人生を生きなければと改めて思い始めています。再び夢を追いかけるのも良いかもしれませんが。たとえ今では途方も無い夢だとしても。

\* \*

ご覧の通りこの度は楽事とは言えない話題となりますが、震災以降の世相を写す話題のひとつと考えて頂きご容赦願います。

## パナソニックインフラシステムです！

当社は、本年4月1日にパナソニックグループ内で事業統合を行い、パナソニックSSインフラシステムとして発足いたしました。

新会社は、パナソニックグループのシステムソリューション事業の中核を担う会社として、パナソニックのコンポーネント事業との連携により、オールパナソニックの技術を生かした新しいインフラシステムソリューションを創造し、貢献することを理念としております。

せっかくの機会をいただきましたので、ここでは新聞・印刷以外の事業内容について、簡単に紹介させていただきます。

### ●高度映像監視

映像伝送技術や画像処理技術を活用して、建物監視、駅構内監視、侵入者検知等社会の

安心・安全な環境づくりに貢献しています。

### ●ITS (Intelligent Transport Systems)

高度な制御・無線技術でスムーズな道路交通の最適化を実現しています。

「ETCシステム」、「交通管制システム」、「交通量計測端末」等を提供しています。

### ●無線システム

自治体様向けに「防災無線システム」を提供しています。地域の安心・安全に貢献しています。

### ●社会インフラシステム

放送設備やダム管理システム、水処理、道路電気設備などのさまざまな社会インフラの長期に亘る運用を提供、支援しています。

新会社となりましたが、新聞・印刷事業をはじめ、広く社会に貢献し続けていくため、努力していきますので、引き続きご支援賜りますようお願いいたします。

## Panasonic パナソニック SS インフラシステム(株)

## 「かずさテクノセンター」本稼働

私ども東京機械製作所では、新たな生産拠点「かずさテクノセンター」が竣工、去る7月1日より本稼働を開始致しました。昭和13年より70余年にわたり、神奈川県川崎市は武蔵小杉の玉川製造所において操業して参りましたが、工場周辺の環境変化に対応するため、新天地にて新たな一步を踏み出すこととなりました。玉川製造所時代に皆様から頂きましたご厚情に対し、誌上をお借りして改めて御礼申し上げます。

「かずさテクノセンター」は千葉県の木更津市・君津市など4市にまたがるテクノパークである「かずさアカデミアパーク」内に位置し、総面積は約10万5,000平方メートル(約3万2000坪)です。時代の経過に伴い段階的に

発展させた為、やや非効率な面が否めなかった玉川製造所の問題点を解消するため、人や物、情報の流れを徹底的に見直し、極めて使い勝手のよい工場が誕生致しました。

今後は、この「かずさテクノセンター」を東の製造拠点、従来からの「伊賀テクノセンター」を西の製造拠点として、お客様のニーズに合致した輪転機製造に邁進致します。また、工場移転に伴い、アフターサービスの窓口となるサービスセンターを、組織的には本社営業部門に移して、交通至便な都内に配置することにより、お客様のご要望に迅速に対応可能な体制を確立することができました。これにより更にきめ細かいメンテナンスや、輪転機の延命化に対応して参る所存です。今後とも皆様の変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

## 高さ4メートルのタワー機

イリスは1859年、ドイツ人の貿易商により日本で設立された商社です。ドイツハンブルグに本社を置き、現在、世界13か国に約450名の社員を擁する企業です。

国内では、東京・大阪を拠点とし、技術・エンジニアリング、そして保守サービスをトータルで提供しております。

イリスでは、印刷に関する様々なメーカーの商品をご紹介します。取扱商品は、印刷機メーカーのKBA社(Koenig & Bauer)を始めとして、水なし枚葉印刷機ジーニアス52UVのKBAメトロプリント社(KBA MetroPrint)、インキジェットプリンターのKBAメトロニック社(KBA Metronic)など、多岐にわたります。

中でも、45%以上のトップシェアを誇り、新聞印刷業界の技術革新の代名詞ともなっているKBA社のセミコマーシャル印刷機コルチナは、現在までに82台以上のタワーユニットが出荷されており、そのマーケットは欧州から中東へと拡大しています。

コルチナは、高さわずか4mの革新的な新型キーレス・水なし・ギアレス印刷機で、環境問題、経済性、そして印刷品質の基準を改めました。

また、6×2、4×2、4×1の印刷ユニット構成が可能で、あらゆるニーズにお応えします。コールドセット印刷で最高の新聞品質を実現できる、全く新しいコンセプトの新聞印刷機です。

お問い合わせ：印刷紙加工機械部まで



## CTP版事業に特化

2回目の会員社レポートとなります岡本化学工業です。初回の会員社レポートでは弊社の歴史について書かせて頂きました。

弊社は商業印刷及び新聞印刷用オフセットPS版を製造・販売していましたが、2010年4月より印刷事業は新聞用PS版及びCTP版の製造・販売に特化し、現在に至ります。

弊社は新聞用CTP版としては業界初のコンパクトプレートを開発し、JANPSなどで発表し市場投入することが出来ました。

一般的にコンパクトプレートのメリットは一種類の処理液で複数社の刷版が可能な事です。

今まで複数購買が出来なかった新聞社では複数購買が可能になり、万一の場合でも刷版の安定供給性が向上したと、ご好評いただ

ております。

弊社CTP版の主な実績として2009年から4社5工場へ他社現像システムにドロップインでご提供させて頂いております。

更に弊社CTP版は自現機洗浄が容易です。

自現機洗浄は約1カ月ご使用後に洗浄を実施すると思いますが、弊社CTP版は現像槽内の残渣が少なく、特別な薬剤も不要です。現場の方々には洗浄時間が短縮できご好評を得ております。

今後、さらに現場の“声”を大切にし、新聞社のニーズに合った商品の開発・製造をし、新聞業界の発展のため、更なる努力をしていきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の東日本大震災で被災された方々へ心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興・復旧をお祈りしております。



岡本化学工業(株)

## 第108回技術懇談会記

### 読売新聞社・木場工場見学

7月21日、前日まで猛威を振るった台風6号が心配されましたが、雨も上がり涼しい気温の中、読売新聞木場工場の見学会が開催され、26名が参加しました。まず株式会社ミナトの川崎取締役工場長、山崎副工場長、海宝工場次長から工場設備の説明を受け、その後工場の案内を頂きました。同工場は2010年2月1日竣工、施設運営を株式会社ミナトが行なっています。工場の案内には読売新聞東京本社技術2部の安達次長および澤井様にも同行して頂き、CTP室、輪転機、給紙部、紙庫、インキタンク室、トラックヤード、屋上を見学。

同工場のこだわりは「災害に強く、環境にやさしく」ということで、耐震構造の建物、工場敷地部だけでなく建物屋上にも緑地化を取り入れ、ミドリカーテンやLED照明、人感点灯の採用、また蓄熱による電力使用削減など、様々な工夫や配慮が感じられる工場という印象を強く受けました。また空調は場所により強弱をつけて空気の流れがより良くなるように工夫している、結果が良くても満足することなくさらに良い方向になるよう日々努力しているという説明も印象に残りました。

夕刊印刷では綺麗な紙面が非常に早く立ち上がり、折機調整しているオペレーターが入



読売新聞・木場工場前にて

社数カ月ということを知って非常に驚いたと同時に教育レベルの高さにも感心しました。通常15万のスピードで印刷をしているそうです。

見学終了後の懇親会は会員と事務局だけの参加となりましたが、情報交換など有意義な時間を過ごしました。

最後にお忙しい中、CONPT技術懇談会に対応して頂きました株式会社ミノリ川崎取締役工場長、山崎副工場長、海宝工場次長、読売新聞東京本社安達次長、澤井様には心より御礼を申し上げます。

(クオード・テック・インク 有川直彦記)

### CONPT 日誌

- 6月29日(水) JANPS準備部会(出席5名)
- 7月14日(木) JANPS2012第1回運営委員会(出席10名)
- 7月21日(木) 第108回技術懇談会～読売新聞社・木場工場並びに江戸東京博物館見学会～(参加者26名)
- 8月2日(火) JANPS準備部会(出席4名)
- 8月11日(木)～17日(水) 夏季休暇

### 会員消息

#### ■担当者変更

- \* 三菱製紙(株)(7月1日付)  
[新] 谷本 泰彦氏(I&Dカンパニー 印刷感材営業部新聞グループリーダー)  
[旧] 豊嶋 守氏(I&Dカンパニー 新聞グループリーダー)

#### ■所在地変更

- \* 三菱製紙(株)(7月1日付)  
〒100-0005  
千代田区丸の内3-2-3富士ビル4階  
TEL番号: 03-3216-7603  
FAX番号: 03-3216-7505